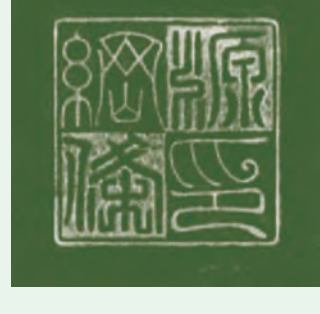
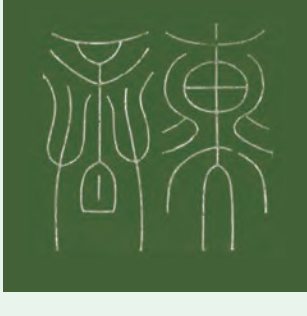
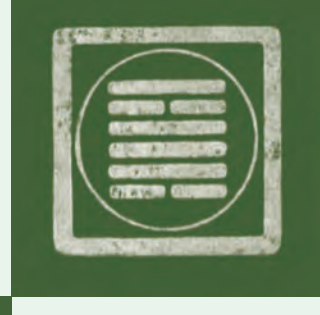


第8回徳川国際シンポジウム要旨集

彰往考来

— Open up the past and ponder the future —





ご挨拶

公益財団法人 徳川ミュージアム

理事長 徳川斉正

この度は「第8回徳川国際シンポジウム」にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

水戸徳川家2代光圀公は中国の史記を学び、1657年（明暦3年）我国の歴史を明らかにするため史書編纂の志をたてました。その志は徳川家の11人の歴代当主に受け継がれ、1906年（明治39年）ついに『大日本史』が完成しました。この修史事業のために、水戸家では古今東西のあらゆる分野の貴重な文物を収集しました。

さらに、光圀公は、1665年（寛政5年）に学問の師として明の高名な儒学者・朱舜水を招き、その後の我国における漢学の礎を築きました。

こうして、水戸徳川家に伝来した文物は、我が国の宝として400年もの間の度重なる天災や戦災をくぐりぬけ、公益財団法人徳川ミュージアムへと受け継がれております。

それらは、我が国のみならず東アジアの思想・文化・科学・芸術の貴重な文化遺産といえます。今日、光圀公や徳川家の歴代当主、朱舜水の教えを受け継いだ多くの学者たちによって深められてきた日本の儒学を、漢字文化を共有してきた東アジアの研究者とともに調査研究することは、大いに意義のあることと考へ、徳川ミュージアムでは2012年（平成24年）から、学術的基礎調査を開始しました。

5年に及ぶこれらの研究は、儒学や思想史に留まらず、その領域を科学や美術の分野に広げてまいりました。本年は新たにオックスフォード大学、ライデン大学という欧州の著名な大学から研究者をお迎えし、本日、国際シンポジウムとして成果報告会を開催させていただけることとなりましたことは、この取り組みの大きな励みとなるでしょう。

そして、このシンポジウムを、139年前に漢学塾として創立され、その永い歴史を誇る二松學舎大学において開催させていただくことができますことは、私たちにとり大きな喜びです。

ここにご支援を賜りましたすべての皆様に深く感謝を申し上げますとともに、これまでの調査がより多くの研究へと発展し、深められていくことを祈念して、御挨拶の言葉とさせていただきます。



ご挨拶

学校法人 二松學舎

顧問 石川忠久

第八回水戸徳川家旧蔵史料調査報告会が、今年も二松學舎で開催される運びとなりました。

本年は、これまでの四次にわたる調査に基づき、9月17日(土)、18日(日)の2日に亘り、台湾、中国、イギリス、アメリカ、日本の思想・文化・芸術の分野の第一線で活躍する研究者によって行われます。

初日は、主に水戸藩初期の、徳川光圀、朱舜水に関する絵画、釈典、葬礼など、及び海防に関する文献に就いてのテーマにより、2日目は、海防に関する鉄砲、反射炉、望遠鏡など、及びミュージアム所蔵の書帖、絵画などのテーマにより、充実した発表と、それに関する討論が行われる予定であります。

また、本年は徳川家康公の400年忌(元和2年、1616)に当たります。その偉大な足跡に思いを致しつつ、水戸徳川家が守り伝えた文化を継承し、発展させていかなければならないと存ずる次第です。

二松學舎では、昨年、文部科学省の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に選ばれ、本年度より、全国の拠点として活動を進めることになりました。研究会とも連携を強めて、東洋学の発展に寄与したいと考えます。

皆様の益々のご活躍を祈念して、ご挨拶といたします。

中洲記念講堂

西洋文明ばかりに目がいていた明治の初め、日本の文化、東洋の精神をしっかりと身に付けてこそ、西洋の優れた文化を日本の社会に活かすことができるという信念のもと、明治10年(1877年)、漢学者であり、明治法曹界の重鎮でもあった三島中洲(1830～1919)は自宅の敷地内に漢学塾・二松學舎を開きました。中洲記念講堂は創業者・三島中洲の名を冠した二松學舎大学の新たな講堂として平成16年に九段1号館に完成しました。



三島中洲



ご挨拶

日本儒教学会 会長

早稲田大学 教授 土田健次郎

徳川ミュージアムは水戸徳川家所蔵の多岐にわたる貴重な所蔵品を整理研究し、その成果を発信してこられました。昨年私が上海の復旦大学で開催された東アジアの朱子学についての国際シンポジウムに参加したおり、中国の銭明博士から、ご自身も関わられた本ミュージアムの事業である『日本徳川博物館蔵品録』三冊を示されました。今水戸の学術の研究は中国でも盛んになりつつあります。私の研究室でもそれを専門とする中国からの大学院留学生を近年四人受け入れてきました。

水戸の学術は、徳川光圀以来、江戸時代を通じて大きな存在感を持ち続けてきました。世に「水戸学」と言うと、とかくイデオロギー過多のイメージが持たれがちですが、柱となる『大日本史』は、堅実な歴史書としても高い評価があたえられるべき書物です。その編纂事業は意外なほどの広がりを持ち、例えば体質が違ってくるように見える京都の伊藤仁斎の学派とも、史学を通してかなりの交流があったことが指摘されています。また水戸の学者たちの著作を読むと、豊かな思想的学問的世界を展開していることに驚きます。今こそ水戸の学術や文化の意義を再考すべき時なのですが、その原資料群は今まで必ずしも見やすい形で公開されておりませんでした。徳川ミュージアムはその状況を打開するための事業を推進されており、まことに心強い限りです。

今回の第8回徳川国際シンポジウムは、日本儒教学会も後援させていただきます。日本儒教学会は、中国、日本、朝鮮、ヴェトナムをはじめアジア各地の儒教を研究する学者を糾合した学会です。国内外の第一線の研究者による今回のシンポジウムが、水戸、ひいては江戸時代の学術、文化の研究のさらなる活性化につながることを、学会としても期待しております。

はじめに

公益財団法人 徳川ミュージアム

館長 徳川眞木

徳川家の約400年の歴史の中で幾度となく戦火や災害に見舞われながら守ってきた約6万点の伝来の文物の散逸を憂いて、13代当主・徳川圀順（1886-1969）は1967年、その保存管理を託すために財団法人を設立しました。設立から50年現在、公益財団法人徳川ミュージアムは、現在は日本国の内閣府が所管する民間財団として、博物館運営と史跡をはじめとする文化財の調査研究、保存修復、公開の文化事業を行なっています。

2010年台湾大学に東アジア文化交流の研究者が世界中から集まり、「朱舜水興東亞文明発展国際学術研討会」が開催され、この研究会で初めて財団は本格的な水戸徳川家伝来の中国の明代の儒学者・朱舜水が遺した文化遺産の紹介を行いました。以来、財団ではそこに集った東アジアの研究者の協力を得て、当初3カ年の「水戸徳川家旧蔵儒学関係史料調査」を計画し、その成果を全3巻の蔵品録として刊行しました。『日本徳川博物館蔵品録(特) 朱舜水文献釈解』『日本徳川博物館蔵品録(監) 徳川光圀文献釈解』『日本徳川博物館蔵品録(企) 水戸藩関係文献釈解』全3巻は、現代的手法による基礎調査を経た、17世紀から19世紀の内外関係と徳川一族が遺した文化遺産研究の大きな成果です。また本調査では、その成果報告会を毎年行って参りました。その活動の一環が発展し、2013年から茨城県水戸市教育委員会と協力して、水戸徳川家2代当主光圀の設立した研究機関「彰考館」の名に由来する「開校・彰考館」プロジェクト水戸徳川家関連史料調査・活用事業を開始しました。

昨年より新たに国文学、美術、技術史の研究者にご参加いただけることとなり、我々の研究成果報告会は、「第8回徳川国際シンポジウム 彰往考来 - Open up the past and ponder the future -」として開催されることになりました。「彰往考来 - Open up the past and ponder the future -」は、徳川ミュージアムの基本的運営方針に示された財団の基本理念です。

世界の中で日本は、アジアの最も東に位置し、古代より西方の国々から稲作、文字、暦など様々な文化的影響を受けてきた国といえます。17世紀の東アジアでは、大国の明が滅び、清がその支配圏を広げるための戦いと混乱の時代が続きました。その中で日本は、1600年「関ヶ原の戦い」に勝利した徳川家康が日本の統一を果たし、武士による新たな政府・江戸幕府が生まれまし

た。政治、文化、経済の中心は、それまでの都・京都から、広い平野に囲まれた新しい都市・江戸（現在の東京）に移りました。この徳川一族による世襲の政治支配は、1867年の大政奉還（天皇に政治の実権を返すこと）まで260年以上続きました。こうした江戸時代は、世界の歴史の中でも特に注目すべき時代といえます。近年、武力ではなく法と礼により社会の秩序が守られていた時代だったとして、ローマ帝国の平和な時代になぞらえて、「徳川の平和-Pax Tokugawana-」と評価されています。この戦いのない時代は、士農工商という身分制度にしばられた封建社会ではありますが、農業をはじめとする様々な産業の成長と各地を結ぶ街道沿いの都市は、人や物の活発な往来により、商業が発展し、人々の暮らしが大きく変化した時代でもありました。特に、教育の普及は目覚ましく、やがて農民や町民による文学、芸能、芸術が花開き、京都とは異なる自由で多様な江戸文化が生まれました。また、支配階級である武士にとっても武力ではなく、学問をもって仕官する時代となり、幕府の官学となった朱子学を中心に多くの学者が活躍した学問の時代でもあったのです。

水戸徳川家の初代・徳川頼房は徳川家康の一番末の息子でした。幕府は、將軍の支配する江戸に大名の正室と世子を住ませ、大名自身は領地と江戸住まいを交互に繰り返す「参勤交代」という制度を設けましたが、水戸徳川家は徳川一門の中で唯一、「参勤交代」を免じられ、歴代当主は常に江戸に住み、「徳川御三家」と称され、諸大名とは別格の家格を与えられておりました。こうして文化経済の中心・江戸で生まれ育ったシティ・ボーイの水戸徳川家の歴代当主は学問を好んだと伝えられています。特に2代光圀は、自ら学問所として「彰考館」を開設し、多くの著作を遺しました。その中でもっとも著名なものは、完成まで約250年間の歳月を費やした「日本の史記」と称される史書『大日本史』です。2015年に日本遺産に選ばれた『大日本史』は、光圀だけでなく、その後の11代の歴代当主が編纂の志を受け継いで完成させた大著で、水戸徳川家の代名詞ともいえるものです。

さらに、この事業のために全国から貴重な史料と多様な分野の学者が江戸の水戸徳川邸に集ったことで、水戸徳川家は常に近世日本の学問の中心の一つであり続け、その後の日本に大きな影響を与えたといえます。

例えば、本研究のスタートのテーマとなった明代の儒学者・朱舜水は、光圀が招聘した外国人学者の一人であり、その中でもっとも優れた業績を遺した人物であったといえます。朱舜水が日本にもたらしたものは、儒学の知識にとまらず、農業をはじめ建築や土木技術、薬学など衣食住に関わる幅広い分野の知識や文化遺産でした。それは徳川光圀の領民を主体に据えた政策を実現させただけでなく、「彰考館」の学者たちの努力により著作物となって、日本全国に伝えられ、共有されていきました。

東アジアの研究者と徳川ミュージアムが共働して行う本調査の目的は、17世紀～19世紀に日本の政治と学問におおきな影響を与えた水戸徳川家のゆかりの文化遺産の基礎的調査の実施とその現代的価値を評価し、日本社会に与え

た影響を考察することにあります。またその成果を公開することによって、多様な分野の研究者による研究に発展していくことを期待しています。

現代社会は、価値観の多様化による諸問題に揺れ動く時代でもあります。私はこの事業が、徳川光圀が史局「彰考館」という名前に託した思いを受け継ぎ、シンポジウムのタイトルに掲げた、「彰往考来- Open up the past and ponder the future -」を实践し、先人たちの築いた歴史と文化を学び、現代人が共感する幸せな未来を創るために役立つ「新たな歴史研究」となることを願っております。